様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０５６６

研究課題名（和文）外国人と日本人の相互理解に関する質的実証研究

研究課題名（英文）An empiric study on the mutual understanding between non-Japanese and Japanese nationals

研究代表者
安　龍洙（An, Yongsu）

茨城大学・留学生センター・教授

研究者番号：８０３６１２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、内藤（1994）が開発したPAC分析法を用いて、1)外国人の対日観、2)日本人の異文化観について探った。その結果、外国人の対日観には、国籍、出身地域による対日観の相違点が存在する一方で、国籍、出身地域に関わらず共通した対日観も多く存在することがわかった。また、外国人の対日観の変化においては、日本人との接触頻度の高さと滞在期間の長さがポジティブな対日観へ変化する要因として働く可能性が高いことが示された。日本人の異文化観においては、海外在住経験が異文化理解の深化や留学に対する高い動機づけになってことや、日本の伝統の良さを再発見のように、自国観に対する質的変化が起きていることが示された。

研究成果の概要（英文）：This study, which utilises PAC analysis as described in Naito (1994), has 2 focuses: 1) the attitude of non-Japanese nationals toward Japanese nationals, 2) the view of foreign culture held by Japanese nationals. The findings showed that, as far as the former is concerned, even if there are some nationality and region induced differences, there are also many simliarities. It became clear that a longer period of contact with Japanese people may be a factor changing the attitude in a positive way. As far as the latter is concerned, a longer stay abroad corresponds with a deaper understanding of foreign culture and motivation toward study abroad, as well as a rediscovery of the value of Japanese culture and qualitative changes in the perception of one's own culture.

研究分野：日本語教育

キーワード：外国人の対日観　日本人の外国観　認知的変容　異文化理解　相互理解　質的研究　PAC分析法

1.研究開始当初の背景
近年、日本においては外国人が年々増えており、今後も増加することが予想される。現在、留学生が卒業後に帰国せず日本の会社などに就職したり、日本の会社が外国から外国人労働者を積極的に雇用したりと、外国人が日本社会の一員として生活しているケースが増えつつある。そのため、このような外国人の日本社会への適応問題に関する具体的な支援策が急務となりつつある。
現在、日本の大学などで学ぶ留学生の生活問題についても大学の国際化が推進される中、多くの大学で留学生の支援・受け入れ環境の充実を図るために様々な調査が実施されているが、いずれにおいても厳しい実態が報告されている。しかし、これらの調査の殆どが質問紙調査による量的データを用いた検討であるため、外国人一人ひとりがどのような態度で日本社会や文化を理解し受け入れ、その態度がどのように変化していくのか、といった問題についてはあまり検討されていない。
本研究で採用するPAC分析法とは、研究分担者内藤（1994）が開発したもので、1)当該テーマに関する自由連想、2)連想項目間の類似度距離行列によるクラスター分析、3)被験者によるクラスター構造の解釈、を通じて個人別に態度構造を分析する方法である。PAC分析法では、被調査者が自由に自発的に項目を作り出し、それに基づいて自らが反応するため、被調査者の自発性・自律性が最大限尊重され、比較的簡単な手続きで個々の被調査者の内面世界について認知的・情意的観点から捉えることができる。
本研究は、PAC分析法を用いることによって外国人と日本人が直面する「多文化共生社会」における相互理解の実態とその変化について個人別に捉え、量的データでは把握しきれない内面世界を深く探る点に学術的な特色がある。それにより、外国人（または日本人）に対する異文化理解教育内容の設計・改善や、留学生（または外国人）の生活指導に具体的かつ実践的な示唆を与えることが可能になる。また、日本人と外国人がパートナーとして互いの文化や習慣の違いを理解し尊重しながらともに暮らす「日本の多文化共生社会」において外国人・日本人の双方に求められる具体的な対応策を整理することができる。さらに、本研究のテーマのように質的に大きく変化していく現象や、多様な文化背景や個人背景を持つ外国人・日本人の異文化態度に関する深層構造とそのメカニズムが解明するためには、被調査者個人の内面を深く探る必要がある。
異文化間教育の分野において、本研究のような被調査者個々人の異文化観及び異文化態度とその変化を質的に解明することは異文化理解のあり方を考える上で重要な手がかりになると考える。また、研究の成果はグローバル人材を育成するための基礎資料となりうるため、研究の意義は大きい。

2.研究の目的
本研究は、PAC分析法を用いて、外国人と日本人双方の日本観及び外国観について認知的・情意的観点からその変化を探り、日本人と外国人の相互理解の実態を探ることが研究目的である。

3.研究の方法
本研究のように外国人と日本人の異文化観を探るためには、被調査者の内面世界の奥深く隠れた構造を引き出す必要がある。また、質の良いデータを確保するためには、研究者と被調査者の信頼関係が何よりも重要である。そのため、すべての被調査者には事前に調査の実施から研究発表までの全体の流れを説明し承諾を得たインフォーマントのみを本研究の被調査者とし、研究の趣旨に賛同を得られなかった被調査者に無理に調査協力を依頼することがないように十分に注意を払った。具体的には以下の手続きに基づき、調査を行った。①「あなたは日本・日本人・日本社会（日本人の外国観については当該国）に対してどんなイメージを持っていますか」と尋ね、被調査者が自由連想した言葉やイメージを一つずつ記入してもらい、重要だと感じる順位を記入してもらう。②自由連想の言葉やイメージ同士が直感的にどの程度近いかを７段階尺度で評定してもらう。③回答を基に各イメージ間の類似度距離行列を得た後、それをクラスター分析で処理し、デンドログラムを作成する。④その結果に対する被調査者自身の解釈を求める。⑤調査者が総合的解釈を行う。

4.研究成果
本研究では、外国人と日本人の異文化観の変化を探るため、1）外国人の日本観・日本留学観とその変化、2）日本人の外国観・外国留学観とその変化、3）日本語学習者の日本語学習観とその変化について、それぞれ検討した。
（1）外国人の対日観とその変化
まず、1）外国人の対日観とその変化の研究成果について述べる。①中国人留学生の来日前後の対日観の変化（安2013）においては、礼儀正しい日本人、ルールを忠実に守る日本人、曖昧な行動を取る日本人などは先行研究の対日観と一致することがわかった。対日観の変化においては、来日後に対日イメージが新しく生まれたケース（例：友達に家族のことを話さない日本人）、来日後に対日イメージが消滅したケース（例：伝統文化の日本刀）、来日後に対日イメージが弱くなったケース（例：電化製品の国）、来日後に対日イメージが強く

なったケース（例：日本人の曖昧さ）、特定の対日イメージが深化・具体化したケース（例：重圧社会、島国）、プラスの対日イメージが弱くなったケース（例：日本人の礼儀正しさ）などが示された。
②日本滞在歴の長い韓国人の対日観の変化（安他 2013）においては、「個」を重視する日本人、規範意識の高い日本人、個人主義でありながら集団重視の日本人などは先行研究の対日観と一致することがわかった。来日当初と現在との対日観の比較（変化）においては、対日イメージに変化がみられないケース（例：親しくなりにくい日本人、プライバシーを大切にする日本人、自己主張をしない日本人）、特定の対日イメージが弱くなったケース（例：日本人の規範意識の高さ）、特定の対日イメージが強くなったケース（例：日本人は体格が小さい）、特定の対日イメージが無くなったケース（例：冷たい日本人）、マイナスイメージが無くなったケース（例：日本人はお世辞を言うが本心は違う）、プラスの対日イメージが弱くなったケース（例：誠実で約束を守る日本人）、マイナスの対日イメージがプラスイメージに変わったケース（距離を置く人間関係）、プラスの対日イメージがマイナスイメージに変わったケース（例：真面目に日本人）、対日イメージを異文化として認め同化現象が起きつつあるケース（例：親友を作るのが難しい）などが表れた。
③ベトナム人留学生の来日前後の対日観の変化（松田 2013）においては、先進国、年配者は親切だが若者は不親切、消極的な日本人などは先行研究の対日観と一致することがわかった。対日観の変化においては、対日イメージに変化がみられないケース（例：日本人は規則を厳守する）、来日後に新たに対日イメージが形成されたケース（例：どのような仕事でも手を抜かないこと）、来日後に対日イメージが強化、具体化したケース（例：家族のために自分を犠牲にすること）、特定の対日イメージが変化したケース（例：日本人は冷たいと思ったが実際は親切で優しい）が示された。
④ブルガリア人の留学前後の対日観の変化（2014 安他）においては、ルールを守る日本人、他人を思いやる日本人、仕事に厳しい日本社会などは先行研究の対日観と一致することがわかった。対日観の変化においては、対日イメージに変化がみられないケース（進んだ技術）、特定の対日イメージが強くなったケース（例：文句を言わない日本人、便利で安全な日本社会）、来日後に新たに対日イメージが形成されたケース（例：食文化）などの結果が得られた。
⑤ウクライナ人の留学前後の対日観の変化（松田 2014）においては、働きすぎる日本人、技術が進んでいる日本、規則が多い日本などは先行研究の対日観と一致することがわかった。来日前後の対日観の変化においては、対日イメージが強化したケース（例：就活・過労死等の社会問題）、対日イメージが具現化したケース（例：人間関係と宗教の関わり）などがあることがわかった。
⑥韓国人の日本留学観の変化（2014 安）においては、「反韓感情」に対するマイナスイメージを有しているのに対して、親切な日本人に対してはプラスイメージを有していることがわかった。対日観の変化においては、「反韓感情」や地震・放射能に関しては、来日後そのイメージが弱くなっていることがわかった。
⑦日本留学経験を持つ韓国人の帰国前後の対日観の変化（2015 安）においては、親切な日本人、規範意識の高い日本人、質素倹約する日本人などは先行研究の対日観と一致することがわかった。対日観の変化においては、対日イメージに変化がみられないケース（例：日本の文化、社会のルール、緻密さ）、対日イメージが強化されたケース（日本人の親切さ、安全を重視する日本社会）、対日イメージが弱くなったケース（例：経済大国、若者の節約意識）が示された。
⑧日本永住者の対日観の変化（2015 安）においては、定住者は日本の食文化や暮らしに密着した自然に関するイメージが多く、日本の代表的な伝統文化に対するポジティブなイメージを有していることがわかった。また、日本人の親切さや閉鎖性などについて複雑に捉えており、日本人とは仲良くなりにくいことや形式を重んじて融通の利かない日本人像は短期滞在外国人の対日イメージと一致することがわかった。対日観の変化においては、日本を象徴するような存在（例：天皇、神社、桜）に対しては、積極的に評価（プラス評価）するような対日観に変わっているのに対して、日本の製品、日本人の親切さ、日本の政治については、来日当初のポジティブなイメージがやや揺らいでいることがわかった。
⑨工学系大学院留学生の日本生活に関する考察（藤原他 2014）においては、日本人との人間関係が最も多く表れ、特に研究室における他者との関係が留学生活観に影響を与えることが確認された。留学生が直面するに問題については、研究室の習慣に対する意識、日常的に用いる言語（能力）、財政状況等により個別の特徴が表れた。
⑩奥村（2016）は、グローバル人材の育成を目指し推進される山梨大学の協定大学との交換留学プログラムで 10 カ月から 1 年間派遣・受入れされた調査協力者 39 名を対象に PAC 分析法と）とマンスリー・レポートの内省記述の分析を基に、留学意義のイメージや意味解釈を加えながら、認知変容の分析・考察を縦断的に行った。その変容には共通した特徴が

見られると同時に、深層レベルでの異文化理解が見られた例では、異文化適応過程が複眼的な視点を身につけ他者の受容と自己理解を伴う人間的成長、時には葛藤や苛立ちを感じつつも自立に向けてのステップとなっていることが明らかとなった。
以上の研究から①被調査者の国籍に関わらず共通した対日観が多く存在すること、②特定の対日イメージが来日前後（あるいは、留学前後）でそのイメージが強くなったり弱くなったりするケースがあること、③来日後（あるいは、留学後）で特定の対日イメージが新たに生まれたり消滅したりするケースがあることが示された。特に、日本で就職している被調査者は来日当初のネガティブな対日観が就職後には総じてポジティブな対日観へ変わっていることから、日本人との日常的な接触頻度の高さがポジティブな対日観形成に影響する可能性が示唆された。その一方で、日本定住者は日本を象徴するような存在に対してはプラス評価する傾向があるが、日本人の親切さなどについては、来日当初のポジティブなイメージがやや揺らいでいる現象もみられた。さらに、交換留学生の留学意義のイメージや意味においては、異文化適応過程が複眼的な視点を身につけ他者の受容と自己理解を伴う人間的成長及び自立に向けてのステップとなっていることが示された。
（2）日本人の外国観・外国留学観とその変化
日本人の外国観等に関する変化については、海外における韓国語研修前後の留学に対する意識の変化（池田 2014）、海外における英語研修前後の留学イメージの変化(池田 2015)、海外滞在経験を持つ日本人の自国観（日本観）の変化(内藤 2014)についてそれぞれ探った。その結果、短期研修の経験者においては、長期留学への意欲が高まった感じていること、勉強に対する姿勢や対人関係に対する意識や行動に変化は起きていると感じていること、留学費用に関する意識を持つようになったことが示された。また、海外在住経験が異文化理解の深化や日本の伝統の良さを再発見する質的変化が起きていることが示された。
（3）日本語学習者の学習観とその変化
日本語学習者の専門領域学習におけるスキーマ形成（石鍋他 2016）について調べた結果、学習期間が医療専門領域学習観の変化に影響を与える可能性が示された。
（4）まとめ
本研究の結果、外国人の対日観には、国籍、出身地域による対日観の相違点が存在する一方で、国籍、出身地域に関わらず共通した対日観も多く存在することがわかった。また、外国人の対日観の変化においては、日本人との接触頻度の高さと滞在期間の長さがポジティブな対日観へ変化する要因として働く可能性が高いことが示された。日本人の異文化観においては、海外在住経験が異文化理解の深化や留学に対する高い動機づけになってことや、日本の伝統の良さを再発見のように、自国観に対する質的変化が起きていることが示された。
以上のように、外国人の日本観（あるいは、日本留学観）の変化、及び日本人の外国観（あるいは、留学観）には異文化体験によりその変化に一定の規則性がみられることが示された。

5.主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 17 件）
①石鍋浩、松田勇一、安龍洙、『医療専門留学生の専門領域学習観スキーマに関する PAC 分析を用いた事例研究』、留学生交流・指導研究、18 号、45-57、2016、査読有
②藤原智恵美、杉浦秀行、『工学系大学院留学生は留学生活をいかに捉えているか：PAC 分析による事例考察』、留学生交流・指導研究、16 号、7-20、2015、査読有
③安龍洙、『外国人の対日観の変化に関する研究-中国人留学生の来日前後の対日観を比較して-』、茨城大学留学生センター紀要、11 号、1-16、2013、査読有
〔学会発表〕（計 5 件）
①石鍋浩、松田勇一、安龍洙、『医療専攻留学生の専門領域学習の質的変換の検討-PAC 分析を用いた縦断研究-』、2016.3.4、第 18 回専門日本語教育学会研究討論会、京都産業大学（京都市・下京区）
②石鍋浩、松田勇一、安龍洙、『医療専攻留学生の専門領域学習観に関する PAC 分析を用いた事例研究』、2015.3.7、第 17 回専門日本語教育学会研究討論会、武蔵野大学 有明キャンパス（東京都・江東区）
③安龍洙、『「留学生指導」領域への PAC 分析の応用可能性について』、2013.2.5、第 1 回留学生交流・指導研究会、大阪大学吹田キャンパス（大阪府・吹田市）
〔図書〕なし
〔産業財産権〕なし
〔その他〕なし

6.研究組織
（1）研究代表者
安　龍洙（AN　YONGSU）
茨城大学・留学生センター・教授
研究者番号：80361286

（2）研究分担者
内藤　哲雄（NAITO TETSUO）
福島学院大学・福祉学部・教授
研究者番号：20172249

杉浦　秀行（SUGIURA　HIDEYUKI）
茨城大学・留学生センター・准教授
研究者番号：70619626

池田　庸子（IKEDA　YOKO）
茨城大学・留学生センター・教授
研究者番号：30288865

松田　勇一（MATSUDA YUICHI）
宇都宮共和大学・シティライフ学部・准教授
研究者番号：50406279

奥村　圭子（OKUMURA　KEIKO）
山梨大学・総合研究部・教授
研究者番号：10377608

石鍋　浩（ISHINABE　HIROSHI）
国際医療福祉大学・保健医療学部・助教
研究者番号：90424051

金　光男（KIM　KYANGNAM）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：10261728

藤原 智恵美（FUJIWARA　CHIEMI）
茨城大学・留学生センター・准教授
研究者番号：40510201

（3）連携研究者
無し

（4）研究協力者
無し